

## 児島湾の現状について講演しました

平成 25 年 9 月 8 日（日）に、瀬戸内市中央公民館で、せとうち村塾主催の市民大学講座が開催され、水産研究所の石黒技師が児島湾について話題提供を行った。

せとうち村塾は、明日をよりよく生きる知恵を学び、実践する場として瀬戸内市の地域住民を中心に設立されている。毎月 1 回、県内外から講師を招き、自然、文化、教育など様々なテーマについて勉強会を開催しており、今回は、約 15 名の参加があった（写真 1）。

講演は「漁場としての児島湾 むかしといま」と題して以下の内容で発表した。

児島湾では、かつて広大な干潟が存在し、潮流も現在よりも非常に速かったと言われている。湾内では児島湾独特の漁法であるかしきあみ檜木網漁業やスベリイタを用いた干潟漁業などが盛んに行われ（写真 2、3）、昭和初期には 3000 人以上が漁をしていた。その後、大規模な干拓事業や締切堤防建設によって、干潟は消滅し、潮流が弱まったことで湾内の漁業は著しく衰退した。

最近の状況については、近年行った水産研究所の調査結果を示し、児島湾はアユやフグなどの稚魚の生息場所として重要な湾である一方で、夏季に湾奥の海底付近で酸素が著しく減少することや、底質が悪化している問題を紹介した。

講演の休憩中には、我々が普段使用する採水器、採泥器をはじめ、最新の機器を展示し、参加者に、実際に触れて体験しても

らった。

講演後には、児島湾に関するもののほか、近年の水温上昇や、ノリ色落ちに関することなど、様々な角度から質問をいただいた。中には非常に専門的な意見もあり、参加者の関心の高さがうかがえた。

（水圏環境室：石黒）



写真 1 講演の様子



出典：児島湾の漁民文化

写真 2 かしきあみ 檜木網



出典：写真集岡山県民の明治大正

写真 3 スベリイタを用いた干潟漁業